

民俗資料館だより

第4号 1997. 3. 21

発行 加茂市民俗資料館

住所 加茂市大字加茂229-1

電話 0256-52-0089

民俗資料館でふるさと「加茂」の再発見を！

加茂市民俗資料館長 田澤 弘 一

民俗資料館は、平成6年11月から現在の建物に移転・開館しておりますが、本年2月末現在までの2年4カ月間で、延べ7,300人余の皆様方からご来館を頂いており、心から感謝を申し上げます。

当資料館では、産業の進展や生活様式の変化に伴い使われなくなり、昔の生活をしのぶことができる家具、建具、農機具あるいは埋蔵文化財の調査において出土した旧石器時代や縄文時代まで遡る石器や土器など約1,200点を常時展示しています。

いずれも今となっては貴重な物ばかりであり、小学校の授業にもご利用を頂いており、是非もう一度行ってみたいとの嬉しい感想も多く寄せられ、大変有り難く思っております。

平日ご来館できない方には、毎月第2・第4の土曜、日曜日の開館も行っており皆様をお待ちいたしておりますので、どうか今後ともお気軽においでくださるようお願い申し上げます。



平成8年度 加茂市で指定した文化財の紹介 (指定番号 31号 平成8年8月12日)

昨年度、市内本町小林昭吾氏より小柳家文書他352点を市でお役に立てていただきたいとのごことでご恵贈頂いた。その内、既に108点は市の文化財に指定 (S.63.12.6) されていたが、残りの中から厳選された文書109点が今年度市の文化財に新たに指定された。

年代は寛永4年から慶応4年(1,627~1,868)迄の文書で、特に江戸時代後期(近世)の文書が多く二分の一強を占め、町の人々の生活(金銭の貸借、田畑の貸借、遺産相続、年貢米の納付、開発・開田の許可申請、田畑の譲渡等)を知る史料として大変貴重である。文書は故小林藤六氏が屏風や軸装、綴じ物等に丁寧に仕立てられており、保存状態も大変良い。現在、当民俗資料館に保管されている。

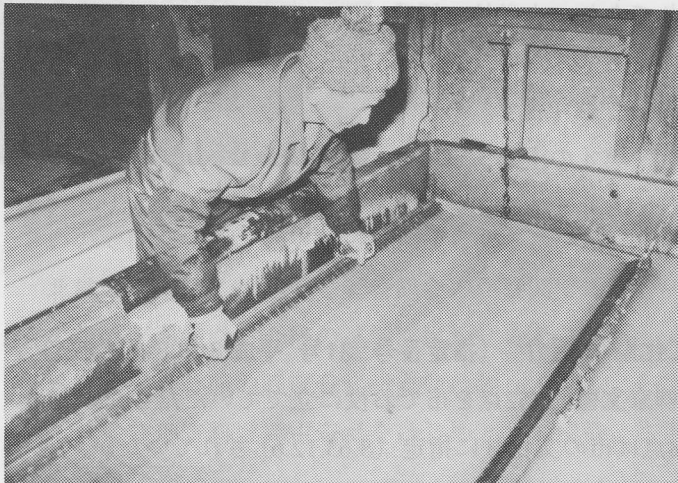
I. 七谷和紙（加茂紙）の今昔

加茂市文化財調査審議会委員 長谷川 昭 一

手漉きの和紙は、かつては私たちの生活のあらゆる場面に登場して庶民の生活になくてはならない実用品であると同時に、日本文化の基盤をささえあたたかく育んでくれた。加茂川流域は古くから紙漉きの盛んな土地で、その中心地七谷での和紙製造の起源は中世にまでさかのぼるといわれている。江戸時代から太平洋戦争後、昭和30年代まで、新潟県下最大の和紙の産地として加茂と「加茂紙」の名前をほしいままにしてきた。しかし、平成5年に最後まで「加茂紙」を漉いてきた下大谷の田浦嘉久司さんが紙漉きを止めてからは、市内では紙漉きを見ることはできない。

民俗資料館の二階、階段を昇った突きあたりの第四展示室に「加茂紙」の製造に関するパネルや用具、原料のコウゾなどが展示され、原料から和紙ができるまでの工程がひと目でわかるようになっている。ここに展示されている道具類の多くは、最後まで「加茂紙」を守った田浦さんから寄贈されたもので、生産技術の変化をたどった最後の姿を示している。

まず写真パネルで、原料のコウゾの刈り取りから始まる原料加工の段階、原料を水に溶かして紙に漉きあげ乾燥するまでの工程が一覧できる。正面には「漉き桁」や「サグリ」をセットした「漉き船」を置き、左側には天然乾燥用の「紙干し板」、右側にはコウゾ蒸し用の大釜が目立つ。冬季間に冷たい水を使う紙漉作業には必需品の「手温め桶」原料コウゾの表皮を取り除くための用具の「ナデ」「ナデ包丁」原料コウゾの実物が木から皮まで等々……。



紙漉工程（紙料を漉簀に掬い上げてゆする）

れた元結水引が新潟の街で売られていた。「加茂紙」は加茂紙版といわれる障子紙をはじめ襖紙、梨紙、カラカサ紙、チリ紙、渋紙、提灯に貼るものなどその用途は広がった。それも太平洋戦争後は洋紙にその座を奪われて衰退の一途をたどって、昭和35年に七谷地区で32軒の紙漉きに減った。このころが産業としての「加茂紙」の最後の姿で、昭和49年には下大谷で2軒となり、平成5年には最後まで残った田浦さんが廃業して「加茂紙」製造はとだえた。

慶長17年（1612）に新発田藩では藩庁で使用する厚紙8950枚、中折紙522束を代米42石余で加茂組で調達している。七谷でもこのころ村上藩の統制下で和紙の製造が発展し、村松藩に引き継がれた。

七谷で生産された和紙は「加茂紙」の商標で、加茂町の紙商人の手で世にだされた。宝暦6年（1756）の「越後名寄」に「二千枚（七谷産の代表的な紙）是尋常ニ加茂紙ト称シ通用ス」とある。このころ加茂で製造さ

Ⅱ. 平成8年度の歩み

1. 入館者数

平成8年4月～平成9年2月			
	市 内	市 外	計
大 人	835	1041	1876
小中学生	574	319	893
計	1409	1360	2769

移転して2年を経過し春を2度迎えたが、1年目に比較して来館者が減少した。しかし、市外からの来館者はやや増加気味である。特に雪椿祭り前後や祝日の多い4・5月に来館者が多い。

2. 資料収録の状況

本年度は2名の方から12件127点のご寄贈を賜りました。お礼を申し上げ紹介させていただきます。

<寄贈品名>

・ 甌（こしき）	2 点	・ 冷温器、暖気樽	1 3 点	・ ぶんじ	4 点
・ 水とう	1 点	・ ロート	1 点	・ かぶと	1 点
・ 甌靴	1 点	・ 半役	2 点	・ 袋取り器	1 点
・ 酒袋	9 9 点	・ 可盃	1 点	・ 祭礼用ちょうちん	1 点

<寄贈者ご芳名（五十音順 敬称略）>

小柳 莊 古川ろうそく店

3. レファレンス・サービス（民俗資料館への問い合わせ）

当資料館には収藏品や展示品、市の歴史・人物や遺跡等に対する問い合わせが、来館・電話・文書等、年間を通して数多くある。平成8年度（4月～2月）は17件とやや少ないが県外からの問い合わせが大半である。資料館手持ちの資料や、文化財調査審議会委員の方々にお問い合わせしたりしてお答えしている。今年度は何故かルーツ探しの問い合わせが多く全体の三分の一を占めている。

- ・ 江戸時代、加茂の物産「水引元結い」について
- ・ 加茂市が日本発祥の地といわれているマカロニーの資料について
- ・ 加茂出身「早田文蔵」（植物学の権威）の生い立ちや信仰について
- ・ 「遠藤七郎左衛門、遠藤七郎（北辰隊隊長）」について
- ・ 「西窪頸山」とからくり屏風について
- ・ 須田氏（須田城址―現地藏院―及び城主との関連）のルーツを求めて
- ・ 猿田彦神を祀る神社の存在について
- ・ 志田氏（七谷地区出身）の系譜を求めて
- ・ 加茂の市と市場標柱について
- ・ 大賀ハスが加茂に至った経緯について
- ・ 「加茂縞」の資料について

4. 館外活動

① 古文書講座

今年度、市の文化財に指定された「小柳家文書」を中心に加茂市の歴史を学んだ。今回は数えて12回目になる。

・開催日 6月22日 6月29日 7月27日 8月17日 9月14日

・会場 加茂市公民館 第一研修室
(時間 午後7時～午後9時)

・講師 加茂市文化財調査審議会
委員 関 正平氏
同 長谷川昭一氏

・受講者 延べ109名

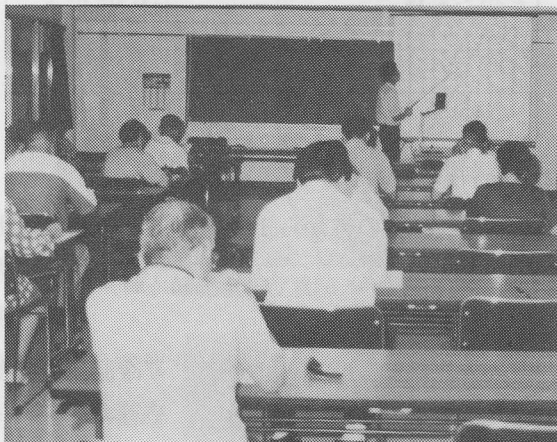
・内容 「小柳家文書から見た上条・加茂の歴史」

(7) 関氏は小柳家の家系や小柳家が肝煎になった経過、新発田藩

の行った検地制度、新田村の成立過程等を文書を通して解説された。

(4) 長谷川氏は町の肝煎の願いや社会情勢を文書を通して解説された。

講座を通して感じられることは、受講生の人数が初回と終回ではやや尻つぼみの傾向にあるということで大変残念であった。



② 歴史講演会

近代史の権威であり、県下数多くの市町村史の編さんにも携わっている講師がご自身の収集された資料をもとに講演された。

・開催日 9月28日

・会場 加茂市公民館 第一研修室

・演題 「維新開化期の加茂」

・講師 加茂市文化財調査審議会
委員 溝口 敏磨氏

・参加者 37名

・内容 明治16(1883)年、「国史編輯ニツキ」の加茂郷民俗の書き上から、当時の加茂の気風や風土がど

のようであったか、特に、三条郷との対比や、現代加茂人の気風が伺える興味深いものであった。参会者の中には時々頷いたり、笑みを浮かべている参会者もいた。恐らく自分自身が近縁者に覚えがあったのだろう。



Ⅲ. 平成8年遺跡発掘調査と出土遺物について

本年は様々な開発の波が加茂市にも押し寄せたため、近年にない発掘調査数となり、貴重な発見が相次いだ。発掘調査はいわゆる遺跡を写真・図面などで記録し、後世に伝える作業である。様々な困難から、十分な記録保存ができない調査もあるが、その調査成果の一部について紹介する。加茂市の歴史の一端に触れていただければ幸いである。

① 舞臺遺跡 — 中世 —

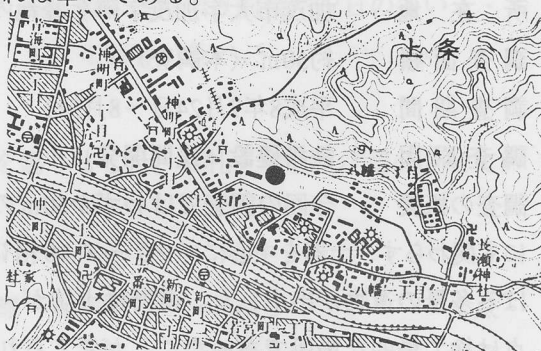
所在地 加茂市大字上条字舞臺地内

調査面積 約1,200m² (本調査)

調査期間 平成8年3月28日～6月1日

調査原因 都市計画道路改良

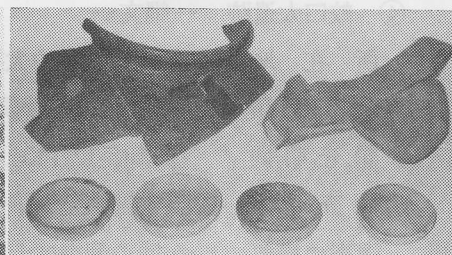
調査の概要 遺跡からは、鎌倉時代(約800年前)を中心とする井戸、柱穴、河川跡などが検出され、河川跡から多量の遺物が出土した。主な遺物は、国産陶磁器(珠洲焼・越前焼など)、舶載陶磁器(青磁・白磁など)、かわらけ、鉄製品(刀子・釘など)、古銭さらに特筆すべきは、多量の本製品がある。なかでも呪い札とも言えるべき木簡が4点出土したことは、当時の祈りの世界を考える上で大変貴重な資料となる。このように本遺跡からは、中世加茂の生活用具が豊富に出土し、文献からは窺い知れない暮らしぶりをあきらかにしてくれる。



舞臺遺跡位置図 S=1/25,000



発掘状況スナップ



出土遺物

② 馬越遺跡・鬼倉遺跡・丸瀉遺跡 — 古墳・古代 —

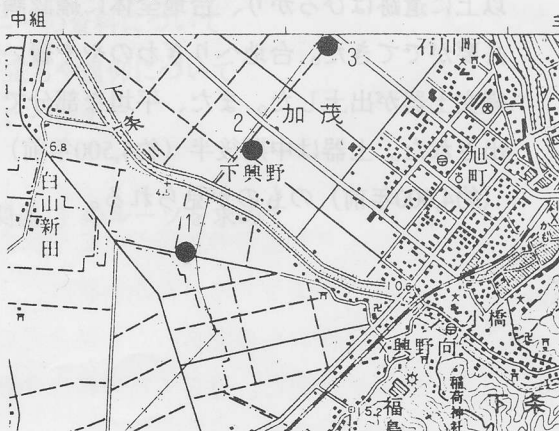
所在地 加茂市大字下条字中谷地・字鬼倉、大字加茂字丸瀉地内

調査面積 約840m² (確認調査)

調査期間 平成8年6月3日～6月26日

調査原因 国道403号線道路改良

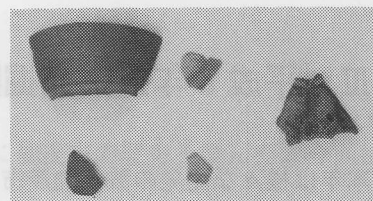
調査の概要 今回の調査は国道403号線バイパス法線内に存在が予想されていた馬越・鬼倉・丸瀉各遺跡の内容や範囲を確認する目的で行われた。当初の予想どおり、法線内に平安時代(約1,200年前)の遺跡が存在することが明確になったが、丸瀉遺跡では一部古墳時代前期



遺跡位置図 S=1/25,000

1. 馬越遺跡 2. 鬼倉遺跡 3. 丸瀉遺跡

(約1,700年前)の土器が含まれていた。また、鬼倉遺跡からは文字は判読できないが、市内初の墨書土器が出土した。当地域の平野部における遺跡形成や今まで他市町村に比べ様相が不明であった古代青海郷の一端にせまる貴重な事例と言え、今後の本調査に期待が寄せられる。



出土遺物

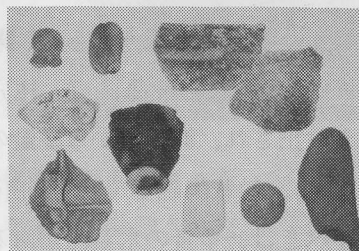


陣ヶ峰北遺跡位置図 S=1/25,000

③ 陣ヶ峰北遺跡 — 縄文 —

所在地 加茂市大字加茂字陣ヶ峰地内
調査面積 約50m² (本調査)
調査期間 平成8年7月24日～8月5日
調査原因 鉄塔建設 (民間開発)
調査の概要 今回の調査ではわずか50m²の調査

にも関わらず、土器を中心にパンケース40箱にものばる多量の遺物が出土した。遺構は土坑が一基あるが、本地点は捨て場的な場所であったことが考えられる。中には市内初の土偶、土錘などの土・石製品もあるが、中期前葉 (約5,000年前)～後期前葉 (約4,000年前)にかけての縄文土器 (特に後期前葉が中心) がほとんどである。



出土遺物

④ 蚊口太遺跡 — 縄文 —

所在地 加茂市大字中大谷字升沢地内
調査面積 約270m² (確認調査)
調査期間 平成8年12月10日～12月21日
調査原因 県営圃場整備事業
調査の概要 今回の調査は大谷地区における圃場

整備事業計画地内に存在する蚊口太遺跡の内容と範囲を確認する目的で行われた。現段階での調査では、予想以上に遺跡はひろがり、台地全体に確認調査のメスをいれる必要がでてきた。台地へりぎわのやや緩い斜面部から多量の縄文土器が出土した。また、平坦な部分でも柱穴や土器が検出された。土器は中期後半 (約4,500年前)のものと後期前葉 (約4,000年前)のものが見られる。



蚊口太遺跡位置図 S=1/25,000



出土遺物

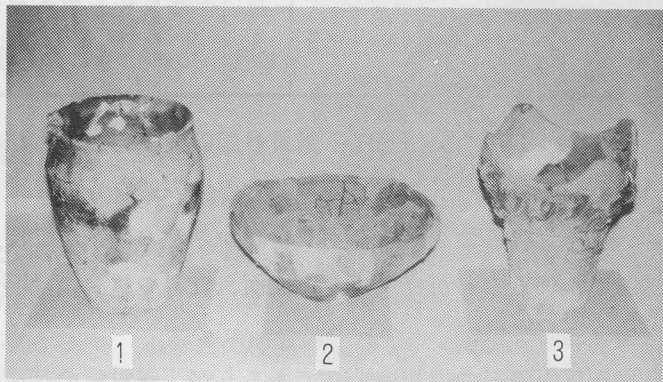
IV. 展示資料紹介コーナー

シリーズで紹介している市指定文化財。今回は第2展示室の「水源池遺跡出土縄文土器」3点を紹介する。昭和38年より建設の始まった水源池第1ダムのダム底部分より発掘された土器で、八百枝茂氏によって復元された。縄文中期頃（約4,500年前）のものと思われる。

（市指定 昭50. 1. 12）

1. 甕形土器

高さ39.5cm、口の直径28cm、底の直径18cmの甕形土器である。特徴は口の周り部分3cmは模様が無く1箇の突き出た物がある。この突き出た物は蛇の頭の部分を表したものである。突き出た物の下には蛇の尾の部分を思わせるようなS字状で凹みをつけて次第に細くなる粘土の紐が張りつけてある。頭の部分の裏側には目玉を表したと思われるくぼみが1ヶ所ある。甕の口の周りの6ヶ所に蛇の体の模様を表したと考えられる6ないし7の刻み目が付けられてある。甕の胴の部分の模様は上の部分に集中し、地模様は網目の模様で、胴の部分と首の部分の境には二重になった長楕円形の掘られた線が横位置に付けられ、楕円の内側には先の尖った出っ張りがある。このような楕円が6箇胴の上の部分を通る。口の周りの突き出た部分の下で楕円の長径が最も短く、右へ進むにしたがって長くなっている。



なお、この土器は平成 7. 7. 18 付新潟日報「日報抄」に引用されている。

2. 浅鉢

高さ19cm、口の直径42cm、底の直径16cmの浅鉢である。地模様は縄目の模様で鉢の上の部分にだけ付けられ、口の周りは二重で4つ目玉状の円の模様が対称的に付けられている。目玉の模様の下を口の周りとはほぼ平行に、粘土の紐を指で押さえつけて波の形にして周り全体に張りつけてある。目玉の模様の下に大きな渦巻き形の盛り上がった線を張りつけ、他の空間は半分に割った竹で盛り上がった線と平行に掘られた線を垂れ下げるように描いている。

3. 深鉢型土器（王冠型深鉢）

高さ38cm、口の直径30cm、底の直径15cmの深鉢である。口の周り及び底の内側に炭になったものの付着がみとめられる。把手上半分は復元物であるが、4つの把手間にある環状の突き出たものを中心に左に1個、右に2個の粘土の紐でS字文が張りつけられている。又、把手の真下にも環状の突き出たものが付けられ、その真下の首の部分にも同じような突き出たものが付けられている。その突き出たものの上を刻み目のある太い盛り上がった線で首の部分と胴の部分を区別している。この深鉢は火焰型土器より先に作られたものと考えられ、又、縄文が使用されていないのが特徴である。

V. アンケートの結果

今年度5月より入館者に、アンケートをお願いした。入館者全員のアンケート回答に期待したが、残念ながら全員とはいかなかった。集計結果は次のようになった。

5月～2月 入館者数 2268名 アンケート回答者数 150名 回収率 6.6%

	男			女			展示室の可否（男）				展示室の可否（女）			
回答数	78			66			第1展	良44 可32 否2	第3展	良44 可28 否3	第1展	良52 可14 否0	第3展	良51 可15 否0
市内外	市内 27	市外 50		市内 26	市外 40									
来館数	初回	2回	2回以上	初回	2回	2回以上	第2展	良41 可35 否2	第4展	良57 可16 否1	第2展	良40 可25 否1	第4展	良55 可11 否0
	60	9	8	55	3	8								

アンケートの上記結果から当資料館の展示内容や方法については概ね好感を得ているが、要望、問題点も指摘されている。その代表的なものを上げると各展示室関係では

- 展示資料に懐かしさを感じ、暖かさをおぼえた。展示資料に触れられたり、商家の部屋に上がれることが良かった。反面、資料や語源の説明不足の指摘があった。

全体を通しては

- 貴重な資料の保管は大変であろうが、資料館の存在は貴重である。後世に伝える使命を自覚して頑張っていて欲しい。今後の注文として、VTRや映画等の映像を使った資料提供や音声による解説や音楽を流すことなども考えてみてはどうか。資料を使って体験したり工具を使ったり出来たらもっと良いのではないかな。また、資料館全体としてスペースがせまいのではないかな。歴史の古い加茂としては展示されていない資料が多くあると思う。更に北越の小京都に相応しい資料館なのか疑問である。

との指摘があった。今後の運営に生かせるところは大きいに参考にさせて頂こうと思う。

現在、当資料館の収蔵資料総点数は約16,500点、その内、展示されている資料は1,235点である。未整理資料は考古資料をはじめとして民俗、文書資料等に多数ある。

編集後記

レファレンスやアンケートを通して感じたことは、市内外を問わず資料館に期待している方が多いということである。期待にそえるよう何とか努力していきたい。

第4号 発刊に際し、ご多用中にもかかわらず玉稿をお寄せいただいた長谷川昭一氏（文化財調査審議会委員）に感謝申し上げたい。今後、当資料館がますます充実し、より市民の身近なものになるよう、各位の一層のご指導と更なるご理解ご協力をお願いする次第である。